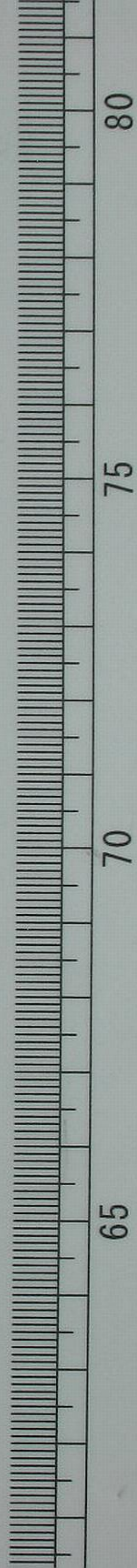




通俗
渡邊義方編輯
日本小史

第六編

下



A 557
12

俗通日本小史六編之下

東京

赤崎延房檢閲
渡邊文京操觚

却^クッテ説^トク北條實政の勇畧^{ユウリヤク}よくその図^ヅは的^{オビ}りた^レ
一戦^{イチセン}は元軍の膽^{タマ}を寒^{サム}う^レ一^ツめ遂^ツは上陸^{ジョウリク}をさ^レしめ
む鷹島^{トウシマ}まで逐退^{シツタイ}をけ尚^{ナホ}攻撃^{コウキョウ}の策^{サク}を建て雙方^{サウホウ}相持^{ソウヂ}
し^レと戦^{セン}う^レむ海岸^{カクヱ}防禦^{ボウゴ}の軍備^{イクビ}を整^ツへ^レま^レき^レく油断^{ユダツ}を
き^レもの^{モノ}の^ノ敵^{テキ}は名^ナは負^カふ大國^{オウコク}よて我^ワ國^{コク}は十^{ジュウ}倍^{パイ}まる
四百餘^{ヨウヨク}州^{シュウ}の強兵^{キョウヘイ}十萬^{ジュウマン}侮^ウど^レうが^レた^レ外^{ガイ}國^{コク}と雌雄^{シユウ}を争^ア

日本小史 六編下

48-3443

安危存亡前代未聞のおとよりのまを上一人より
 下萬民よりのまを何れも焦慮せざるもなく恐る
 多くも龜山上皇よりの深くまを成憂ひたまひ親ら
 御筆と添させられ認めたまひ一通の祈禱書と伊
 勢の神廟に捧げらま御身と犠牲よりの以て國難
 代らせたまふと祈る御心の誠を神由納受ま
 くらん閏七月十三日一天俄よかた曇り颯と吹来る
 一陣の風もろとも強雨盆を覆へまをりり降そ
 ぎ雷さくおどろくらく落かるべく鳴をさめぬ海面

忽ち泡だちる激浪怒濤天は漲り風雨まほしく
 烈しくくく暗々滅々咫尺を辨せまをくる不思議
 の天変は驚き怖る元軍の狼狽周章暴風を避んと
 楫と繰り艦と押まり必死とあつる働らけど不知
 案内の海路あり殊よの暗闇は航路を誤まりさし毛
 手堅き兵艦も暗礁に觸れて碎るり風雨の為
 一に沈没し幾千の軍兵海に溺れ大魚の腹中に葬
 りける軍慮微妙き名将實政よの図と技を遂撃
 せよと劇しき指揮よ勇と立つ勇士猛卒先と争ひ

馴まて迷まぬ如法夜の風雨と犯して元軍の狼狽る
 最中へ攻寄せし奮激突戦せざる由なく偶々風雨
 の難と逃るるもの我軍兵は撃たれ十餘万の元
 軍も死し脱きて歸るるもの僅に三人累々たる伏
 屍の海を埋め十餘丁の間歩りて行を得たりと云
 ふ元主忽必烈大いに恐るる雨後我國は入寇せざ神
 國の名空しくしるる一陣の颶風元軍を塵殺し伊
 勢の神風平穩し治まるる聖代あそめりしと人々安
 堵の思ひをなすぬ七年七月時宗卒まその子貞時執

権職を継ぎ父の官爵を襲ふ十年帝位を皇太子と
 禪る熙仁親王立つたは依伏見天皇とふま正應二年
 九月貞時將軍惟康親王と廢して京師に放逐し後
 深草帝の三子久明親王と迎へて將軍とふま北條
 氏の專横此に至りては甚だしく將軍職を
 名あつて實なく廢立黜陟の權一は貞時の手裏に
 在り應長元年貞時卒まその子高時年甫九歳その
 成長まで一族宗宣熙時相並んで執權となりしが幾
 程もなかりて宗宣熙時も卒ま基時および金澤貞



天狗来り
て高時が
酒宴の
奥と添也



顕あれ又代りて執権たり高時の舅安達時顕家令
 長崎田喜等ともいふ貞時の遺命よりて俱に高時
 を輔佐し拮据黽勉よく育養の任に堪え五年遂
 に高時と立ち執権とみせしが北條氏の晩運固
 不由なく高時性来暗愚狂暴嘗て政務を顧みず時
 顕田喜も委任し其の身も日夜酒色に溺れ只に
 遊惰を事とまざるのと然且ども二人心と惚せよく
 泰時が旧規と遵守し料理頗ぶる宜しきものなり
 四喜は年老て職を辞しその子高資も是より代りし

より父の似ざる嗚呼の白漢多慾よりて飽工を
 ありて黜陟予奪賄賂を以て依估の沙汰なり偏
 頗の處置のみ多しゆる人人心志ざいのよ乖離して
 怨望あまき者少なりき元亨二年陸奥の人安藤亮
 勢ある者一族たる季長と采邑の境を争ふと訟へ
 双方互ひに賄賂を贈り只管法を枉んおと成請ひ
 一うを高資双方の賄賂を貪り月と経れども遅
 々して決せざる勢季長大りの怒り采邑を據りて
 兵を挙げ初め北條氏に叛く高時更に意となさ

おまゝに暴威を逞ましう一日高時庭前より狗の
 噛合ふと見ていと面白きあとし思ひ焚犬ありハ献
 つきと偏く天下より徇示し忽ち四五千頭の焚犬と
 集め輿に載せし往來し飼ふ魚鳥の肉と與へ者ま
 るる錦繡の衣を纏えし尊敏愛寵人より超え其を
 て常は鬪ハしめ以て樂しむとたりはものこのり尚飽き
 たりども田樂と好し樂師数千殿中より伺候し酒
 宴の興と添ゆるがゆゑその纏頭の費へもまじ少な
 めらぎ一タ高時乱酔し肱と枕は高軒志ざりくあり

て眠り覺め傍を顧みれば盃盤狼籍近侍の男女も在
 らざれを好み道とて一人蹠跟く足を踏あり
 つ一歩は高く一歩は低く拍子乱る舞の手やいと
 も愉快な覺えし折し何処より米りらん十餘
 人の樂師忽然として出来り舞は合せて謡ふと曰
 く天王寺は妖靈星あり君よりや君見やと縁
 之し声面白く謡ふを聞つけ近侍の人々君よ
 へ目覺したまひらん伺候せやと来りて障子
 の間より窺へば是は如何の彼樂師ハ真の人

間より、鼻高く口尖とがり、穴相悪態帝
 ろ、異類異形の天狗を、何れも呆とて為術
 なく尚も形況を窺へば高時更に知らざるおとく
 俱に舞ひ俱に歌ひ、奥稍尽きて樂師の姿へか
 き消えおとく失しと思へを高時そのまゝ打倒し
 前後の知らず寐入りたり人々奇異の想ひをなす
 其処等を見よを獣の足跡坐中、狼籍なりたりし
 と暫くあり高時に眠り全く醒て後よの事を聞
 と、虽も夢り現り、幻りの覺え一毫ごよみ、ういと云

あは北條氏の亡ぶる兆を是と表せしものありべし
 初め北條氏承久の乱と定め後堀河帝と立つ帝位
 と太子を傳ふあはれ四條帝とを幾程もまくり
 帝崩御ましませしうへ朝議順徳帝と立てんと
 せしを當時鎌倉の執權北條泰時往昔の日承久の
 戦ひよ土御門帝の乱謀と関與せざると以ていと頼
 もしく思ひて其恩志を報せんと安達義景ある者
 を上洛せしめ既し帝跡の定まりしと廢し後嵯峨帝
 を史と立つ帝の二皇子後深草龜山相繼て帝位し

日本書紀 六編下

昇りたまひし後嵯峨上皇特は龜山と愛したまひ時頼は遺詔して龜山の後長く皇統と承しめよとつゝ是は於て兄弟のかん中矛盾して何となく睦まじくは後深草上皇禪位の後時宗が力み倚りて政柄と握らんと欲したまひし時宗敢て従はざりて老既よりて龜山帝位と太子を傳ふとまを後宇多帝とま後深草上皇大つゝ不平とどき髪を削りて遁世せんとあたまひしより時宗さらは後深草上皇の皇子とりて後宇多帝の養太子とし立ち伏見帝と

みせ帝の御宇賊浅原為頼なる者あり夜は紛はるる宮中へ潜び入り大膽ふも天子と弑逆し奉つらんとし事成らざりて自殺せしを人或ひて訛言し之を頼とそ龜山上皇は頼を刺客と潜び入りて帝とせし後宇多上皇怒らせたまひ嚴しく貞時を攻しより貞時遂は拒むと得て立て間もあは帝と廢して後宇多の皇子(則ち龜山)を立て後二條帝とす因て後世紛議あるため後深草龜山の二皇

情氣こころは迫せま
里さとは頼たの員みん
漫まんは大事だいじと
妻つまは語かたる



統十年毎トウシウより更スり立タの議ギを定サめたりかくて帝崩御スミタウキヨ
 まマしくクなれば後伏見の弟ケイミと立タて花園帝ハナヅミと名朝議ナサギ
 後二條帝ゴニジョウの皇子邦良クニノヨシと立タて其後そのちと承ツりめんと欲ホ
 せセーが龜山カメヤマ上皇ノミカド特トク又マタ意イと後宇多ゴウタの次子トコより屬ぞり貞サ
 時トキと諭サシしてあまアと立タてむとれ則すなはち後醍醐帝ゴトクありか
 くクの如ゴくは北條氏キョウジョウシ陪臣ヘイジンの身ミと以ヨり世々ヨリヨリ權威クワンイを恣シ
 まマふフ一ヒト刺サさん帝室テイシツの黜陟チュツシツその手裏テウリより歸着キカチヤク一ヒト自ミ
 恣シ暴戾ボウリ至シらざるも義時ヨシトキ泰時タイジ以来ヨリ累世レイセイ恩威オンイを
 布フいと衆庶シュウジヤと懐マけ巧カクふ世界セカイと籠絡リウラクせセーくクバ隙ヒマ

を觀ミふ者モノありるもよくその間ケに殺コロさるル能ヲく高時タカトキ
 の代ヨに至シりて衆庶シュウジヤ稍シヤウその機策キサクを悟サトりシる倦厭クワンエンの
 の色シロと現アハハ一ヒト加カふる小高時コタカトキが暗愚アンウ狂暴クワンボウ亡シる時機トキ
 の至シり一ヒトありと朝野テウヤ拳ケンツツく慷慨クワンカイの大志ダイシと懐マくそ
 う中ナカある帝ミカドハ即位キツイの初ハジメめより北條氏キョウジョウシがかくもてよ
 暴戾ボウリあるを憤イライり如何イカニも一ヒト鎌倉カマクラをうち滅メぼス
 王政復古オウセイフクあさア一ヒトめんと思オモひ立タさせたまふマより
 辱ハけるルも親ミナしく記録キキロク所トコロへ出御イデミありて民タタの訟詞ソウジ
 を聽ミ一ヒトめ一ヒト銳意スイイ黽勉ケンベン治チを求モトめメの歳サイ大ダイ一ヒト早ハヤ

一と五穀殊の外凶作一と萬民困苦るまを聞か
 倉廩を開きて窮民と賑へ一とあん身ハ殊ノ節儉と
 主と一以て百官を誘導一と只管民心を得んと
 希望一と文を講下武を鍊りて偏一時機を待て在
 一と今高時が政御を失ふ人心稍乖離を視
 て多年の望を成しぬと竊ふ喜ぶ後醍醐帝ハ日
 野中納言資朝及び右少弁俊基等と密に事を
 謀るべく一と於て俊基豫一とあ思ふやうかゝる大義を
 思ひ立ち兵を挙る一と先だち一と先よく全国の地理

人情風俗世体と察知せむんを事と臨んで障りあらん
 去れど此事自づと為されを實地の用と為しが一
 故る朝参せむも一とべ人々必を疑えん如何ふも
 一と朝を罷め身と潛め一と此事と果を術の何と
 一と思ひ屈一と在るをり一と巖山の僧徒事と争ふ
 て朝廷に訟たふ俊基元より文才あり對審の日廳堂
 に出で勅命を依り一と僧徒が捧げ一と訴状と朗讀一と楞
 嚴院云々の件り一と至り故意と誤まり一と声高く慢
 嚴院と讀と一とを左でも俊基の不学さよ箇程の

字と知らざるうり笑止やと満廳の人々目注き袖
 紗冷と笑ふ深くも巧める俊基の仕をまじたりと
 心は點頭きいと毛慚愧たる面色ふし席ふも得堪
 名を返朝まじ已が第に帰るとその俣門を杜々外
 出せざるあと半年余り世間を流言せしやう誤讀の
 耻辱と以て朝士に遇ふも面目ありと能く敵と欺む
 く者も必む先づ躬方を欺むく俊基が深慮稍熟し
 其間賤者ふ窶し六十余州を巡行り兵隊用や
 るの地理を察し高山大澤と見るおとよ豫トめ軍

營の措置と區畫し潛びくは兵を募り京師に歸り
 事を図る初めよりと俊基があの遠謀を知る者
 後醍醐帝の帝乃ち土岐頼貞全トく頼貞多治
 見國長等を召しその企謀を告げし皆喜んで
 勅を奉り黨與既に定まり謀畧を熟考り成以
 る事と發するの目近きま在らんとし頼貞心より以
 為く大亂既に發せを生延へんあと思ひも寄らむ
 素より朝廷に奉ぜし身の今更惜むは足らぬと
 余慶るがう我妻よもその意を得させ置るをわと

一日この妻は向ひ云へるやう我かん身と仇儼は
 ありさうり既に三年を経過し俱は老んと欲され
 ど弓矢とる身の習ひとて翌日ふも兵乱起りなれば
 戦場の露と消え吾が命も契りさへ果敢るは別と
 しまらんも知れむ左なりともかん身よく吾と思ふ
 の実なりを假令あつた身も死するとも貞操の心を
 失ふなば永く泉下は契り結むん左なりともや
 とりつゝよまれば夫が詞と不審しと要るなりと妻
 はまうり寄り忌もしき事と曰まふものうる百年の

苦樂を君は任せし妻が身たは君死したまふとも
 仇し心のちるなきぞ雨曰まふ何ぞまは仔細あ
 り気まその御様子包と隠さば明しなりと云々
 なれを別るぞとなし下言仰せりつゝむをば強便
 宜し思ひ絶えたる後の歎きとけりすとち隠し
 りつゝ却つてあまか情けまがたき情けなりと喃吾夫と
 うた口説くかの俚諺よりくるあり婦人の一髪大衆
 を繋ぎとむると空ある哉頼負遂は我妻の甘き言
 は牽きとる実も斯々云々ありと漫ろは大事を口

走りし妻を聞き聞ふり大り驚きかくも夫が思
ひ立しとあれを今更婦女子が喋々と百とび諫め
たれをて由聞入とたまふ去とてよのま
りら捨置き若し他より事洩とる夫を煮らう言
一族いふある憂目ふ遇えんもあれを免ふも角ふも
我父の語り何と禍害と免ぐる術と談合せん
と急ぎ實家よ走行きて父より齋藤利行よ云々の
由告げたりる利行の北條の武士よしてまの時六
波羅の奉行たりしが竊り頼貞と召らせ懇々利

害を説き聞かせ今及つと自首なせむ罪と贖あふ
のさしむ思賞その身と汰不さん枉と志しを改
たりよと説く頼貞忽ち志向強轉ぶる
反覆表裏六波羅に至りて帝の企謀逐一自首及
びたり北條範貞大つと驚き在京の兵士を集め
時を移さば一齊に土岐多治見の第と囲て無二
無三に攻入りの遂に頼貞因長と殺し資朝俊基と
囚へる鎌倉に護送を帝憂憤を極く甚どりと勢
ひ抗しをりて吉田中納言冬房の諫めよ任せ

日本書紀 六編 二



其二

國光即智竹と
攀る虎口城
脱る

誓書を高時と賜ひるその罪と謝したまふ高時乃
ち俊基と赦して京師に歸し資朝の死一等を減
トく佐渡は流し事稍やく治まりしと高時の怒
り尚やまば謀主たるより資朝を憎むと甚
どしく元弘元年夏六月佐渡の守護職本間山城入
道と命トく殺さんとせし資朝の子国光歳僅し
十三母ととりふ京師に在りしが父の當り殺さんと
しとの風評を聞き哀悼ふ堪えむいふに佐渡に赴
むと父が必死と救ひ出し若叶のむら父子のりとも

同トく死せんと孝子の決心幾子の艱苦と嘗つて辛
くしと佐渡に航り本間氏の館に至り生前に今一
度父子の對顔と許させたまふと思ひ入つてぞ歎き
乞ふ山城入道その孝志と感ト許させまく欲せし
と鎌倉の聞えと憚りしと敢て免さば同族本間三
郎とす資朝を殺さむ國光憤怒やる方まく箇
程とて又請ふよと一度の對顔と許させ情なく
も我父と残害せしと口惜けれ俱不戴天の父の
仇やへり報と置べきと病ひと稱しと本間が館に

滞留しゅうりゅうまゝあり敷日しきじつをさく撃うちたる隙ひまを窺うかがひ一が
一いち夕風ゆふかぜ雨烈あめつよしく雷かみさへいと鳴なりをさめたる黒白くろはくを分わ
ぬ烏羽うは玉たまの闇やみと幸さいひ国光くにみつを折やれと夜深よる
を待まちち己おのが寢所しんじよと抜出ぬきだせたる妬ねた又また合あはせし怨うらみの
刀尖やぶさを案内あんない知したる入道いりだうが寐室ねむを潜ひそく小窺こさうが之を
入道いりだうを在あらざし只ただかの本間ほんま三郎さんらうのの前後ぜんごも知
らで熟睡じゆくすいすアナ喜よろこむを三郎さんらうを我父わがちちを斬首ざんしゆせ
し當あたの仇敵あだかたへ是奴このやつあり何なにも免あまきよあざむ
令しん入道いりだうへ撃うちめりまとも三郎さんらうとぞ小撃こうちすべ少すくしへ

怨うらむと報あやゆるよ足あしとりと跳はり入いらんとたうせしうど枕まくら
頭かぶあり燈火とうかの光ひかりりしく明あるよ見み外とほりりしうど
一ひと大事だいじ便宜えんぎと猶なほ豫よめつ見みは傍かたの障子あかりまど窓
よ半射はんしゃの火光くわくかと睨にらひ来きる飛とぶ夏蛾あつあひニツニツ要えんと
そつとと国光くにみつが徐ゆるく窓まどの障子あかりまどと明ある飛とぶ火ひは
入いる夏蛾あつあひの燈火とうかと忽たちち撲滅うちくせつたり国光くにみつ則すなち跳は
り入り片足かたあしあがれ三郎さんらうが枕まくらと丁ていと蹴けりせを敬馬あやうまさ
覚さる本間ほんま三郎さんらう起おくとまゝ起おちしもやうお上のり
つと国光くにみつが小腕こでうでまゝも一生懸命いっしやうけんめい父ちちの仇思あだをひ知

日本外史 六編

世とそが心元をさし貫きたる下刺し刺殺し本懐遂
し上りて我も此の世の望みも疾きくを自殺し
る泉下の父も見えんと刀逆手に取あふし腹へ突
立んとしたりしが翻然として思へらく我母あり
養あふぎらるる君あり仕えざるべし死に父
の志望継ぎらるる死を安くし生に難し迅
く死せを徒らよ世の胡慮とあふんのみ只命運
を天に任し脱るるだける脱して見ん進退既し谷
まらばその時死するも晩きよあふと伶俐も思

ひ決りて逃し出んと為さるもの諸門の鎖り嚴
重しと出ぬる道のあふざれた如何せん彼方
此方と見すへる館の四面より深き壘の圍り在り傍
らよ茂竹あり國光とくと見澄し最とも修き竹
竿を拳ぢその梢より登り果れば自然と竹へ懸し
壘の外面に至ると國光頓て手と放てば竹へその
まへ反上りその身の難く地上より下り立し辛くも
虎口を逃し出で船より搭して京師ある母の許へと
馳走ぬ秋七月高時重ぬる俊基と執へ京師よ於

日本小史 六編

之殺害一尚も心も飽たらずや帝はよび皇子護良親王親王親王も帝の第三の皇子よして幼小して兵部卿は任その後薙髪して天台の座主となり大塔宮と稱す天資勇武兵術は達一劍法と善したまふの鎌倉と窺ふを察知一往昔承久の故事よ倣ひ恐も多くも至尊おろひ皇子と廢一海島よ遷一ありあせんと使者と京師よ上せ囚へ奉りつくとあせりしと帝疾くも謀ひ知り護良親王の策を用ひ夜よ約し南都よ行幸一たまひ大納言藤原師賢よ御衣を

賜ひ伴たりて天子と稱し車駕叡山よ幸きまるとの体をなす一之賊兵を欺むく六波羅の守護北條仲時全くと益帝なり宮中ふ在まると思ひ直ち小囚へ奉りつんと兵を率めて寄来り隈なく捜せど既にちる落させたまひ一跡なれを手と空しく考へ引く一帝の叡山よ在りと聞き一万余騎の兵と指揮たりたり一攻は攻潰さんと錦旗よ抗する不敵の賊隊煮より期一たり護良親王山徒と驅て防戦の鋒尖するどた破竹の猛勢進退よくその度よ適ひ追

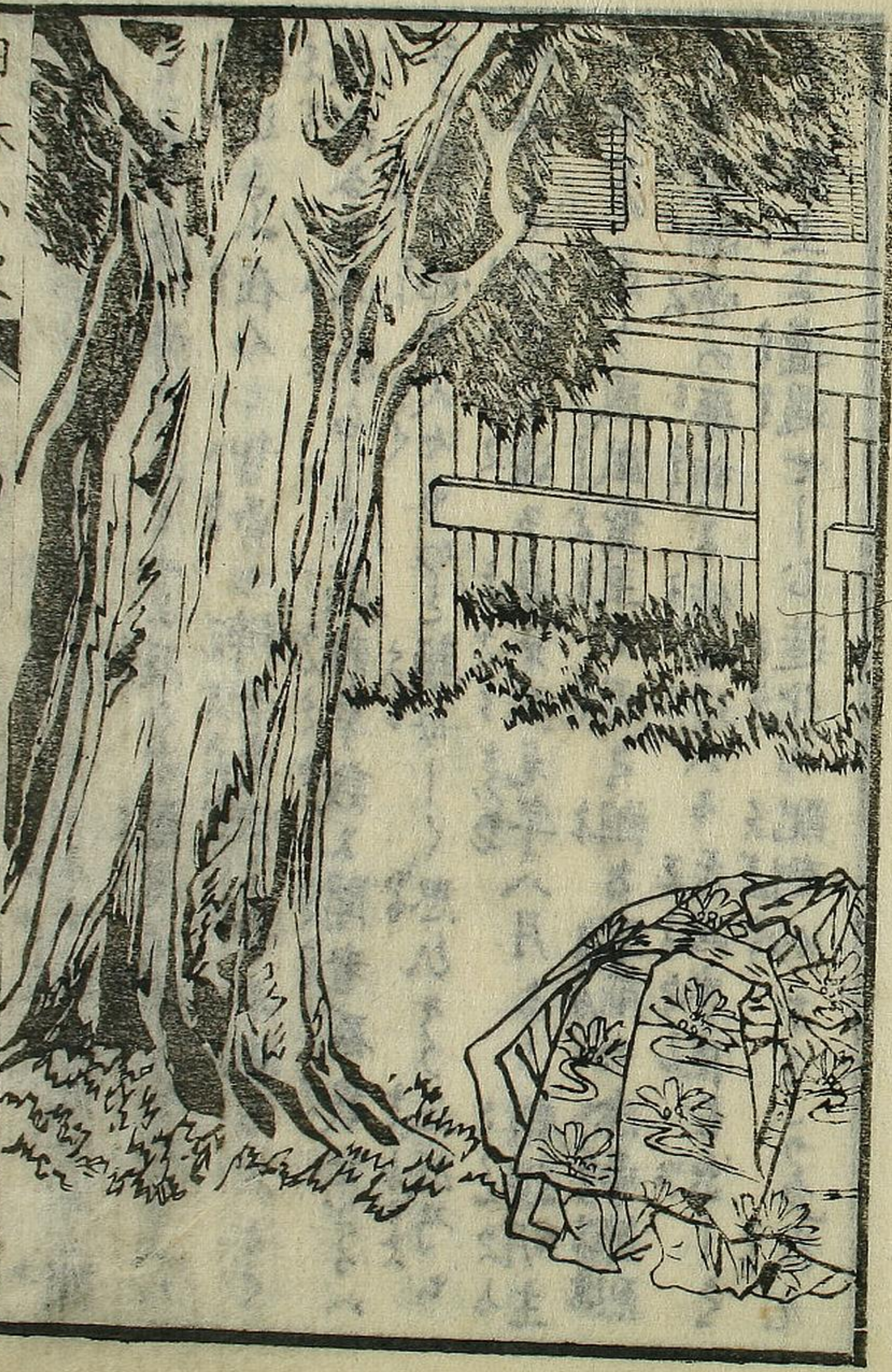
つかくしつかくしの稍やあをよせて一寄手よせてと疲勞つかうを主客もくの戦畧せんりやさ
 一ももも猛まき賊軍ぞくぐんも當あてりぬぬつつ辟易へきえきるせ一が山やま
 徒等とらあひくく師賢しけんが假かりふ帝ていと称なづせせ一しるる真まの天子てんし
 ろろぬぬを知しり無益むえきの戦争せんそうせむもわれれと皆悉みなくく
 解散くさんせせ一しるる又また如何いかんともまままの術じゆつはくく帝潛ていせんの
 南都なんとと出いで中納言ちゆうなごん藤房とうぼうかかららびびそのその弟季房等あにせとうらと從したが
 びび笠置山かさざきやまの行幸ぎやうきやう一したたもも仲時ちゆうとき時益ときえきああと聞きき
 大兵たいへいと遣つをを一しるる来きり攻せむ是こゝは於おて詔旨しよしめいを四方しやうほうの
 下した一し勤王きんわうの兵へいと募もると雖なほも北條氏きたじょうしの威權ゐけん尚強なほく

復勅命ふくちくめいは應おる者ものる一し叡慮えいりよ殊ことは安やすくくを懊惱あうなうと
 る憂憤ゆうふん凝こく一夜いちやの夢ゆめとあり紫震殿しせんてんの南みなの大樹おほじゆあ
 り樹下じゆげの百官ひやくくわん列りと正ただし袖そでと連つねねるる圍繞ゐにやうる一し南面なんめん
 の上段じやうだんの虚席きよせきと設たげ傍かたに侍まる二人ふたりの童子どうし恭こうしく
 奏聞そうもんままるる方今いま逆臣ぎやくしん天下てんかの縦横じゆうげう一し王体わうたいを容ゆると
 奉ほうつるるんんままの地ちるる徒僅とらごんはまの座ざののととりり
 ううと思おもへへを此こゝぞああと覺さて跡あとああた南柯なんかの一夢いちむ帝熟ていじよく
 々々思おもひひたまたまふふやうやう文字もんじよりよりと見みるととたたるる木南きなん
 一し從したがふふの捕とらまりまりああと必かならずず捕氏とらしの人ひとなりなりと朕ちん致ち

佐け以て国難と定むるありめと稍其意と悟りつゝ、
 山僧と召て問うやうり地方の豪傑と捕と以て姓と
 まる人ありやと山僧答へて曰く當國金剛山の西の
 麓に捕正成あり者あり少字と多聞丸と呼び沈勇と
 して武畧あり嘗て山賊と退治あり功よりりて
 兵衛尉と任ぜり是累世州の豪族より帝聞て大いに
 悦び是より思ひ當りて直に中納言藤原藤房を
 勅使と遣て正成と召を召し應じて正成も藤房と共に
 一行在り請り階梯の下に蹲踞なま藤房勅命とてへ

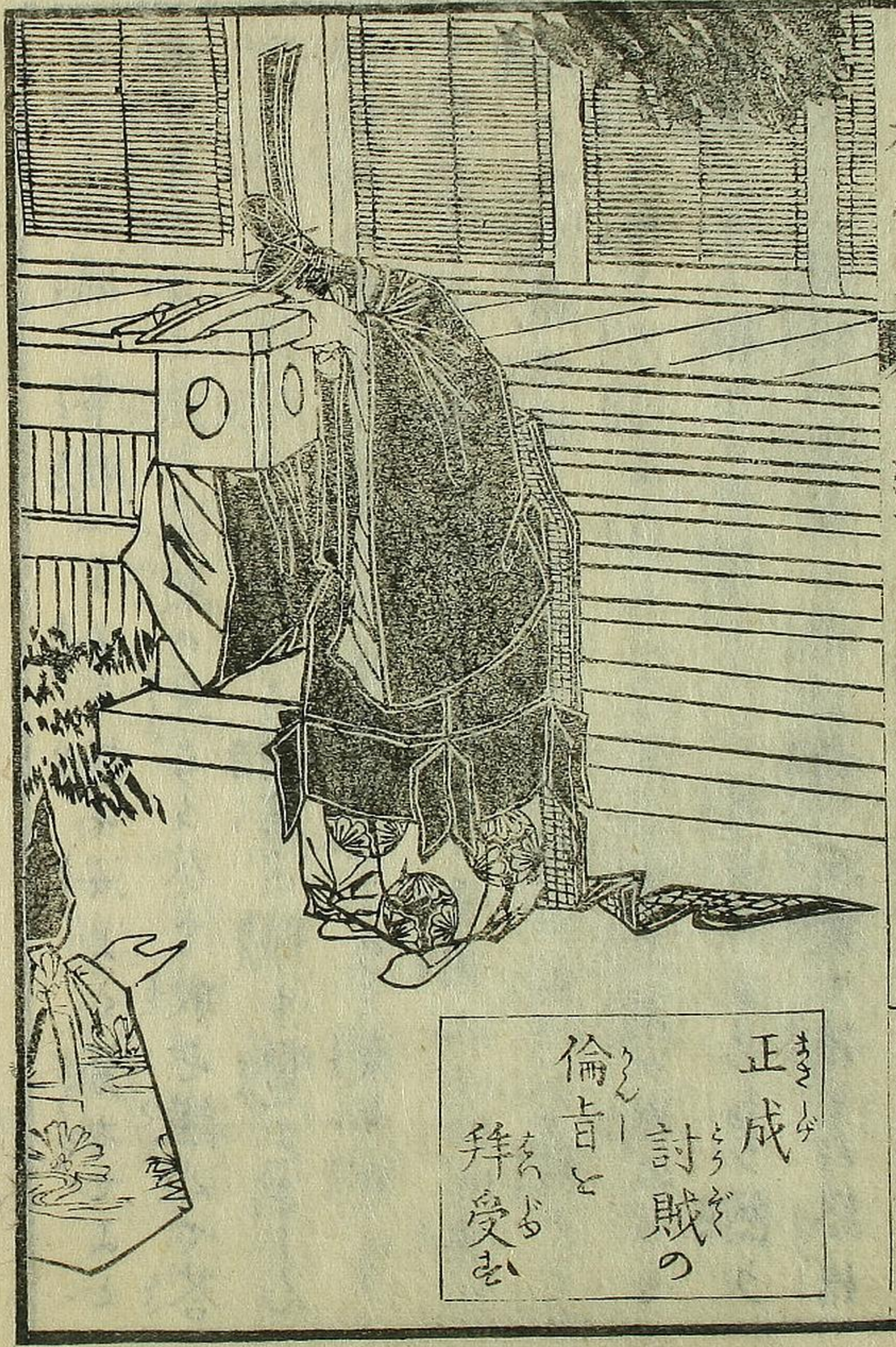
て曰く討賊の事朕一に汝に託ま汝よく努カせよと
 正成面日身に餘り感激の涙を流しひも敢て謹んで答
 へて曰く天誅時に乗るるに何等の賊も斃せざらん
 但戦伐の要なる智謀の得失に在るの東夷勇あり
 て智か一若し勇と較べて戦はるるに全国六十州の兵を
 挙るも武藏相模に當るるに足る智と較べて戦をん
 り則ち臣が方寸に在るより假令幾巨萬の兵ありも
 是欺むるに難くを懼るるに足ざるものあり然り
 と虫ども勝敗に兵家の常百折千挫敢て撓まば終始

日本小史 六編



十三

日本小史 六編



正成 討賊の
倫吉と 拜受む

十三

志望と変むたのりま陛下苟くも正成未だ死せざと聞
くべ震慮を勞したまふよ及むを聖運と開くせたまふの
期近きふ在んと智勇の辨舌爽快は手小把るおとく
演説を耳新らしき高論卓議は聞者感歎せざるは
るく帝と始め人々の頼母しく思ひくう正成乃ち
拜辞して河内へ還る是元弘元年八月なり麒麟明主
を乗せて走り鳳凰聖王よ遇ふ翔る正成の忠勇節烈
も後醍醐帝の夢想よ依て現はる天此忠臣を出し
よの靈主よ遭遇せし造化の配劑妙あるころ秋九

月北條仲時時益等近国の兵七万五千を遣はし笠
置の皇居と犯を官軍小勢ありとりんと死決め
る鋒尖まるどく群がる賊軍と事ともせむ大將足助
重範自り士卒と罵励まし防戦の準備嚴重よを
く賊軍と打ちひけ落さし形のゆるぎあるあぞ高時
乃ち北條貞直足利尊氏等六十三將を遣はし関東の
兵十餘万騎と率めて西上せしむ此時は當りて正成
赤坂の城と築き以て乘輿と奉ぜんとせしが既に行
在ハ賊の囲む処とあり殊更後詰として賊の大軍来

田村川 六編
り援ふと聞りのうら又如何ともまろの術なく笠置
の皇居も今いちや勢ひ尽きて危急よ迫り落去の容
体何う後見て得たりや應と賊軍の衆と恃も四方
より火を放ち迫り撃つ官軍の遠よ防く能く足
足助重範をととめと錦織政俊石川義純全トく
義右等枕と併べと戦死一城と陥され士卒さへ皆
散々よ落失ぬまの夜いとも闇黒くして烈風暴
雨咫尺と弁老是れ少しく便宜と得と帝密らふ
城と出で辛くも脱とたまひと群臣互ひに見失

あひ従ふ者へ正よ是藤房季房兄弟の有王山の麓
を過る及至飲食せざるかと既よ三日逸走りふ走り
しゆも飢渴よ迫りよ一歩ふ進むも退も谷まうり
岩を枕よ臥したまふ更ゆくも肌寒く梢と拂ふ
秋風よ散るや樹の葉の松の露御夜の袖と沾せし
が帝愀然と「と」さゆく笠置の山を以てしう里天
づ下ろいぬれ寂れま」と一首の和歌と咏トたま
へを藤房も生涙と拭ひ「ゆのよせん頼むるげとて
立よれをなう袖ぬるも松の露の露君臣互よ顔と

顔おもふと詞ことばもふくくよ此この日ひ此この時ときの艱くわん難なん辛しん苦く心しんの中ちゆう
 ぞ如何いかあらん哀あはまといふもいと惶うごしかり折ひりて賊ぞく
 の追お兵へいちるむろくと逐おひかけ来きり帝てい及および二に臣しんを捕とへ
 て竹たけ藁ぐわうよ乘のせまめりせ護か送きやうして平へい等とう院いんよ入りて
 後のちもといふある事ことりある且かつ南なん北ほく兩りゆう朝てうの盛せい衰さい如何いか編へん
 を次つぎで説と解くわべし

通目本小史六編之下終

大坂	前川源七郎	越後三條	青柳止兵衛
同	岡島真七	同	丸屋音八
紀州和歌山	津田源兵衛	同	番場吉次郎
阿州徳島	坂井萬吉	同	村山長太郎
遠州掛川	三原屋甚藏	同	山口萬吉
同	天井金藏	同	竹屋利七
三州豊島	泉屋兼藏	同	浅間屋長七
尾州名古屋	永樂屋東四郎	同	嘉坪屋由右門
同	美濃屋代助	同	目黒宗内
同	中村重兵衛	同	佐藤友吉
甲府山梨	内藤傳右門	同	越中屋與八
同	五明堂正八	同	浅野六平
同	小西屋庄左門	加州	近 八郎右門
		金澤	

同	駿州靜岡	武川半七	同	木屋平八
同	今津美之助	同	同	柚木甚兵衛
同	大和屋利兵衛	同	同	岡本榮作
同	曾比屋平七	同	同	中村嘉兵衛
同	翁屋重兵衛	同	同	西村重兵衛
同	高梨與左門	同	同	齋藤八四郎
同	池田孝吉	同	同	近江屋周助
同	横濱弁天通	同	同	光白屋清次郎
同	元町田澤多一郎	同	同	都田誠
同	武州熊谷	同	同	白根屋藤五郎
同	近江屋平吉	同	同	島屋兼吉
同	杉浦平左門	同	同	萬屋長五郎
同	好文章正平	同	同	十一屋源助
同	下總佐原	同	同	羽前山形
同	境田高木直二郎	同	同	
同	上總東金北村甚左門	同	同	

同	豆州三島	堺屋又三郎	同	高田為次郎
同	常州太田	會津屋茂兵衛	同	長谷川虎三郎
同	野州足利	山木屋金太郎	同	田宮五郎
同	今市	中村宗兵衛	同	萬屋利七
同	上州前橋	吉田屋長兵衛	同	本間金之助
同	伊勢崎	橋木屋文次郎	同	角屋直治
同	高崎	川木屋平吉	同	能登山五右門
同	富岡	龜井屋卯兵衛	同	佐々木長藏
同	沼田	關文堂文次郎	同	三陸屋利兵衛
同	藤岡	塚田屋佐太郎	同	及川甚七
同	伊香保	松野屋貞吉	同	牟岐鉄五郎
同	信州長野	小林源二郎	同	壺屋養藏
		小井屋喜太郎	同	澤田正助
			同	盛岡

